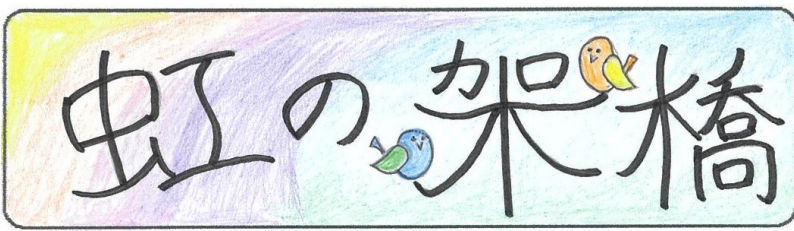


令和2年9月1日発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月1日発行する地域新聞です。



今月の題字
星野 香さん

(みどり市大間々町)

みどり市立あずま小学校の先生。あたたかい居場所づくりと子育て支援の団体「とまり木」の活動にも参加。星野さんとお会いするたびに虹の架橋の話で盛り上ります。

虹の架橋「検索」で、インターネットからでもご覧いただけます。

第75回大間々ながめ亭

9月27日に月見寄席開催!

ながめ余興場では、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から各種イベントの中止や延期が続いてきました。そんな中、NPO法人ながめ黒子の会では第75回大間々ながめ亭「月見寄席」の開催準備を進めています。恒例の花見寄席もほたる寄席も中止となり、一月の雪見寄席以来の開催となる今回は9月27日(日)午後1時半に開演。出演は、林家たけ平、台所おさん、桃月庵白浪さんの落語と伊藤夢葉さんの奇術です。ご来場の際には、①マスク着用

大間々ながめ亭 月見寄席
林家たけ平 台所おさん 桃月庵白浪 伊藤夢葉
令和2年9月27日(日)
午後1時30分~(1時開場)
ながめ余興場 (大間々町)
木戸銭 1,000円



をお願いたします。

ながめ黒子の会では、事前には会場内の換気をチェックし、客席と舞台の間隔を十分に確保し、客席と舞台との間に透明アクリル板を設置するなどの「三密」対策を万全にし、安心してご来場いただけるよう準備をしておりますが、万一の場合も想定して当日券(千円)のみ販売とさせていただきます。
月見寄席の開催に関するお問い合わせは、ながめ余興場0277-7211968 足利屋0277-7311212 みどり市観光課0277-761270へ。



小耳にはさんだ

いい話 (文責・靖)
《301》

感性を磨く生き方

人間学を学ぶ月刊誌『致知』9月号に「感性を磨く生き方」というテーマで行徳哲男先生、芳村思風先生、関ジャニ∞の村上信五さんの三人の興味深い鼎談が載っていました。
今から二十五年前、哲学者の芳村思風先生が書いた『人間の格』(コスモ教育出版)という本を読み、「考え方が人間を決めるのではなく、感じ方が人間を決める」という言葉に共感して繰り返し何度も読んだことを思い出しました。

鼎談の中で、感性についてのちょっとしたエピソードが紹介されていきました。ある小学校の先生が子供たちに「雪がとけたら何になる?」と質問した時に、「ほとんどの子供たちが「水になる」と答えた中、たったひとりだけ「雪がとけたら春になる」と答えた子供がいたそうです。村上信五さんは「それこそ日本人の感性というか、四季という感性がなかったら出てこない発想であり、日本人の情緒が詰まっています」と話しています。
「前後断絶」という言葉があるそうです。行徳哲男先生は、

「感性っていうのは言い方を変えると「点」ですね。知性とか理性というのは「線」です。線で物事を見るから、過去を引きつったり明日に怯えたりして、失敗してしまう。でも、感性は点ですから、点で生きるってというのは、てんで楽なんです」と、ギャグを交えて説明しています。

芳村思風先生は「新型コロナウイルスは人々の意識を転換させようという天意をもって、今の人類に与えられた問題だと思えます。一般的に問題というのは、人間を苦しめるために出てくるのではなく、人間を成長させるために出てくるんです。」

長さを磨くために、社会を展覧させるために出てくるんです。その問題乗り越えていくことによつて、次の新しい時代を生きていく能力や人間性を獲得して勝つことが成長の原理だ。これからは、助け合つて、学び合つて、そして「愛」に基づいて成長していく時代が来る。そのことを新型コロナウイルスは人類に教えてくれていると思えます」と言っています。
今こそ感性を磨く生き方をしたいですね。

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館



今月の作品《301》
富田栄子さんの絵手紙

「虹の架橋」を創刊して2年後の平成9年、大間々町と鳩ヶ谷市が姉妹都市になったのがきっかけで鳩ヶ谷在住の富田さんと出会いました。毎月、虹の架橋を送るたびに富田さんから素敵な絵手紙が届きます。大切な時間と労力と心がかもった絵手紙は虹の架橋を続ける原動力になってきました。17年前につくった100号記念誌の表紙を富田さんに描いていただいたことも懐かしい思い出です。出合いを大切にすること、それを大切に育てることが人生を豊かにする秘訣であることを改めて実感しています。

靖ちゃん日記

令和二年八月十九日(水)
四時起床。虹の架橋三百号記念誌の編集作業七日目。読者の人たちのからの祝福のメッセージや感想のメールや手紙やハガキが百人を超えた。それを一字一句間違えなくべらべらパソコンに打ち込む作業は至福の時だ。Kさんは虹の架橋のこもと原稿用紙に十五枚も書いておられる。足利屋に届けてくれた。虹の架橋をこれほどまでに愛する人に会えて嬉しかった。
たくさんいることに改めて感謝した。
にんべんに湯と書いて怖い(はかさい)と読む。虹の架橋の「虹」は「瞬」で消える。瞬の象徴でもある。瞬のやえに印象に残る虹の架橋を続けてきてよかった。
一日の終わりに、ゆっくりと湯舟につかり、今日出会った人のことを思い出す。風呂から出て、パンツをはかずに腰に手を当て、「赤城山」の冷えた甘酒をグツと飲む。はかさいと時の何と心地よいことか。
朝刊のおくやみ欄や秋の風
立秋を過ぎ、夜明けが少しづつ遅くなってきた。半面、六十年代後半を過ぎると朝起きるのが少しづつ早くなってきた。
新聞受けに朝刊を取りに行く時はまだ星空で、新聞を読んでいるうちに、その空が刻一刻と明るさを増していきます。夜明け前は虫の音が賑やかで、明るくなるにつれて鳥の囀りが大きくなります。
おくやみ欄に知人の名前を見つけたことも多くなってきました。目を閉じて黙祷を捧げ、在りし日の人とのご縁を振り返ります。
今日も一日、『一期一会』を大切にしなければと思います。

第三百二号は十月一日(木)発行予定です。